

告 辞

春爛漫桜の花が満開となった本日ここに、ご来賓ならびに関係各位のご臨席のもと、佛教大学学部、大学院、別科（仏教専修）の入学式を挙げていただけますことは、大きな喜びであります。新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。佛教大学関係者一同心から歓迎いたします。またご子息・ご息女を慈悲の心をもって温かく見守ってこられたご家族・保護者の皆様には、今日までのご苦勞に敬意を表しますとともに、心よりお喜びを申し上げます。

さて、皆さんの佛教大学は、校名が示しますとおり、仏教を建学の精神として設立された大学であります。なかでも鎌倉時代に浄土宗を開かれた法然上人の教えをそのよりどころとしています。インドで仏教を開かれたお釈迦様は、「私とは何か」「私はどう生きるか」そして「私は自分自身に何を期待できるか」、つまり私の生きる道、人の生きる道を求めて修行され、その道を成就され、私たちに人として歩むべき道を説かれたのであります。

一方、法然上人は、末法とも呼ばれた混乱の続く不安定な時代にあつて、生きることに苦しみ、天災地変や戦乱の苦しみにあえぐ人々の中で、やはり私の生きる道、人の生きる道を求められ、自己の愚かさを自覚し、念仏の道を体得し、そしてすべての人が等しく救われる道を説かれたのであります。このお二人に共通する生き様と考え方こそ、本学が建学の理念とする仏教精神に他なりません。

今日から諸君のあり方がすっかりと変わるでしょう。毎朝学校に通う道、校舎の窓から見える景色、人間関係などです。仏教ではこれらのすべてを縁というのです。縁が変わればまた自分自身も変わるのです。自分が変われば、また縁も変わるのです。今日からこの真新しい学び舎が、諸君の縁を広げ、自分を磨く場となるのです。

私は若いころにインドに留学したことがあります。ご存じかも知れませんが、ノーヴェル文学賞受賞者であるデイヴェンドラナート・タゴールという人が創始した大学です。この彼が「大学とは眼をひっくり返すところである」と言われたと伝えられています。私たちの眼は生まれてこの方ずっと外を向いてついています。だから外のことや他の人のことはよく見ているのです。しかし最も近くにあつて、最も大事であるはずの自分自身を見ることはできていません。したがって、私とはどういうものであつて、私はどう生きてゆこうとするのか、私が生きている意味、価値さえ解っていません。まさに大学は外の世界をよく見るとともに、内の世界をもしっかりと見つけてこれらを求める場なのであるということなのです。

私の生きている意味と価値を求めることを勧めた仏教の教えが、諺のように伝えられてきたのが、「桃栗三年、柿八年、柚子は九年で花盛り、梅は酸いとして十三年・・・」であります。桃と栗とは、この世に命をいただいてわずか三年でもって、実という形で自分の生きていることの意味と値打、つまり存在価値を現し出してくるのです。頭と心の働きを持っている人間なら、しっかりと自分の実をつけなさい、というのです。

あらためて現代を省みたとき、社会はますます混沌の度を強めつつあります。まさに人間が、その真の生き方を忘れつつあるようにさえ思える社会となつてきていると言っても過言ではないでしょう。加えて皆さんは参政権を得た立場にあります。したがって、「如何に生きるか」を根本的問いかけとして、生き活かされながらある自分自身をしっかりと見定め、人々の間にあつて自分を活かして生きてゆけることのできる人格へと自己形成を図っていただきたいと思ひます。

今こそ諸君にとって、夢を持つこと、チャレンジ（前向き姿勢）、アドベンチャー（知的冒険）、イノベーション（知的開発）といった人間の智の働きが磨かれる必要があります。そうすることによって、我々はより良い充実した自分の生き方ができるとともに、他に幸せを施すことができるのです。

大学院の諸君は、自らの課題の研究に邁進していただき、学部の学生諸君には、それぞれの学科で自分を磨いていただき、素晴らしい実を实らせていただくことを期待して、告辞いたします。

ご入学おめでとうございます。

平成31年4月1日

佛教大学長 田 中 典 彦